

持 67

377

明治十四年

朝鮮

釜山戯話

隅田英次編輯

八月二日出版



0000000000

0000000000

夫れ數の初めをいちと云ふ喜哉遇可美少女とは彼の諾冊の

二尊が色事始めの祝詞なり出雲八重垣妻込は素盞雄の御

神の太しく立し官所三十一字の歌始め南無阿彌陀佛の初

りは天烈突天竺摩可陀國散髮天窓の釋迦如來禪家に關羽

を祀るのは神秀禪師が行脚して玉泉山に錫を駐め爰には

じめて祀りたり又初午の權輿は倉稻魂の垂跡が午の日な

るを以てといひ鳥銃の皇國に開けしは實に天文八年で崇

神天皇十七年庚子諸國に布告して初めて舟を作りたり

外圖朝貢の權輿は同じ帝の御宇の未六十五年戊子任那圖

蘇那島此知人をして始めて貢を納めけり橋のはじめは

長柄の橋よ邦は大和で郡が半多て月の桂の川水に浮名を流
すはじまりは於半と脊に長右衛門怖いくの首尾して逢て
噫嘻うれしやの乳栗は於三茂平がはじめなり其密男に情死
に孝に不孝に操不貞人間萬事言行の善きも悪きも用捨なく
綴りて勸善懲惡の其益あるは新聞紙夫と又こゝに新發兌
は釜山戯話が美舉にこそ鳴穴賢く纏て江湖に喝采を占ん
じするは物毎の其魁ころ要めなれ此居留地のありさまの月
日いやまし榮へ來て數月を出で盛大の新誌發兌の有とて
是れ二の舞と云はまくののみ此新發兌の釜山戯とば昔の昔し
其むかし父爺が山へ樵夫てふ其物語りと諸共に幾千代かけ

て榮へかして我も藝語のはじめとぞ添けり
辛巳水無月釜山狂居男瘡の下に志るす

九石居士

世の中に絶て釜山戯の

まかりせば二八の妹も

紐はとくまじ

春情翁

朝鮮國釜山港といへば我對馬をさる僅に十里あまりの

海路にて船の通ひもいとかたからぬ所なり天正のそのむ

かし豊臣秀吉公の彼國をことぶけ玉ひし其後に家康朝臣

對馬の縣主義智に命せて釜山港に我館を立られ對馬人の

み行通ひするをゆるされ其外の人は彼の國に行通ふこと

ならざりしがいとがしこくも明治の帝あらためてかれの

くに睦び玉ひて物におくれし役を、しへ導んとあつき

詔のありしより我くにの人皆かれのくに、行通ひするを

許れ是よりをちこちの商人集ひ渡りて貿易をぞなし今は

稍盛んの勢ひをなせり我人の住へる土地は廣からねども

千代をこめたる老松の茂れる中の蔦にしき日ごとく
色をいつていとつつくしく又我館の前には絶影島として僅か
十丁計りの海を隔て廻れば七里の島あり此島には馬の
牧場あり俗に牧の島といふ春は花さき夏は翠りたち秋は
紅葉冬は梢に積る雪の景牧の馬の群りあるふありとま
と漁父の網をうつつありとま常に軒の下に萃めて商船漁
舟その間を過るもの風にたたがひ潮にたよりて右と左り
の港口より出入をなし釜山の城を望めば三里ばかりの
所深樹陰森のあひだに城のまらむべちらくとみわね
たり城の東の濱を牛岩といひむかしわが將小西行長の

上陸せし所といへり城の南に市街あり家數凡そ千軒ば
かり僅左りを舊館といひ草梁村はわが館と距る十丁あ
まりまた左りの港口には五六島てふしまあり巖屹立し
て高さ數丈人の見る所るにたがひるの状をかへぬれ
ば五とも六ともその數を定めがたくひとときは奇妙の風景
なり此景はわが館を徘徊すれば一目に見わたしてやがて
仙人の世界かと思ふほど風雅なりされども玉も磨ざれば
光りなきの謬ならんおのれ明治十年のはじめつがたこ
に來りしそのころはまだわが館に住みつる日本人も僅か
八十人ばかり韓人の往來もまれなり官舎もおほかたは虚

房やにして艸くさにうづもれ居留地きよりうちのきたなきことはいふも
 らなり冬ふゆがれに物ものさびしくもまたあはれなり折をりから彼かの
 邦くにの大飢饉だいきんにて稚兒をきごは飢うろになきおきなは寒さむにおらひ飢うろて
 死ぬるもあり凍こけて死ぬるもあり近ちかきあたりを遊歩あそする
 にも倒屍おきたれを踏ふることありまづしき人のくひものは松まつの
 皮かわとくひ又は牛馬ぎうばの皮かわに熱湯ねつたうとそぎ毛けとさりてくひ
 わが館くわんに来くる人の鰻うなぎの腸はらわたや螺まの屎くそ
 は見みるも中ちゆうく目めもあてられぬ風情ふせいなりわが館くわんの近ちかき
 所ところに住すまへるひとはおほむた食しよくをわれに需もとめり假初かりそめにも吾わが
 ひとの事ことを命おほせるあらばよることひらんとてせぬものはな

かりけり又また男女なんによの色いろを吾人わがひとに賣うるるは此このときより甚はなしき
 はなし昔かしむより彼國かのくにの制禁おきてにて女子によしの我館わがくわんに入いること
 禁おきてじてあれば女子によしも男子だんしの衣物きもの着きつ、其そのいてたちも美たを
 少年ちゆうねんの姿すがたにておとことまごの隔へだてなく海路うみぢく陸路りくぢくを集つひ來き
 て往むかつもどりつたちもとほる稚男みづをみづめ稚女はなの花はなのいろとへ春はる
 さらで飢うろに疲つかる、ありとまはいと寒さむかりしけしきなり
 あるが中ちゆうにも美少年たをやまは晝ひるのかり寝ねのとおすまにむすぶ夢いめ
 とへ憂うれことならん美少女たをやめは鳥羽うは玉たまの閨ねらに愛あひらる高枕たかまくらとこ
 のはなしも言ことどひの我われと彼かれは異ことなりとあつきふすまの
 あた、かにおのづとひらく室むろの梅うめまだ色いろをみぬ初戀はつこひに

むねの氷も解そめて思ひはおなじ鴛鴦の睦ごとくも
 韓と日本の契りにて連理の枝もすゑたのもしからぬ草
 まくら夢さめぬれば又も聞ゆるまつへのどの飢に泣なる
 そのとまにあはれをそへて牧島に嘶く駒もこまひきく
 國の制禁を犯しつゝ玉の緒おけて玉の緒つなぐ女郎花
 いとこもつれがちなるみだれがみおき拂ひ
 つゝうめれける心のうちぞ思ひやられける實この春は
 韓人のあゝ憂目の春なれば焼野に芽づる草よりも茂り
 來れるあそみどり見る物ごとにもりも餘を盗み去るそ
 の所業はいと憎きにも又あはれなり吾人はこれを防ぐに

堪かぬしが月日矢を射る其中にやうく夢の穂も見
 次第に黄む畑の面民のよるこびおほめたならぬおのづ
 去りぬあそみどり實貪しきの盗みとは誰がいひそめし
 ことならん韓人は夢の實とりて憂夢のさめたる心地せり
 此頃より彼と我との貿易も次第に盛りそのうちに秋の
 田面も色ぐみて韓人も賑ひぬるに吾人もいやましにうか
 れ来て菊月の菊の節句の其日には長崎育の酌取女
 三人ばかり竹本何某の内に来り花の店をぞひらきける是
 より居留地の人ぐは花を移せし心地にて夜を晝るよし
 に集ひ行長崎育の山梨も櫻にもどる思ひにて争ひ手折

花の枝を盛るほど盛る花街の賑ひぬるにわれん〜と青樓
と設くる人のおほかりき明治十二年の夏の頃かしここ、
にとちりぐにありし廓を南濱に移し此時より土曜日
ごとに掠利屋の赤貝を検査することになり開利貫懲
より左の通り酷論せられたりき

従来掠利妬猜の向に相雇ひ侯腐序にして將基類似の
所業これあるものは自今他の英業奢において雇入れ
又は死寂いたさせ侯様の儀これあり侯ては賣得慕漁
の指腫にもとり侯情心得違ひのものこれなくやう
熱く偷意いたすべく此旨輪奪侯事

迷路愁荷念賈渴荷重荷日

開利貫懲

爰において掠利屋はおの〜輪奪の旨を守り赤貝競争
の博覽場と設け貝群大種威と請じておひるるの品類
を分ち上品は無病尿臭いの賞牌を授興しくされがひ
は賞牌を取上し上徴毒猫院へ護送することになりてよ
り貝類は露々があぐ不平を鳴しとみおひは泣き
み帆立がひは尻に帆を付けて去りにぼしおひは威儀を
正していへらく將基姦札のなき以上は姦利姦徴といへ
ども妾りに貝類を検査するの犬利はなしと色くに
あざりおひの淺智恵を出して見てもつまり壓制を以てす

ることなれば検査を拒むものは一日も居留地には置ぬと

いふよりせんすべなく〜検査をうけることになりたり

財腐散肛 徴毒猫院 毎土曜日 貝類狂相博亂怪

初怪出品 腎迷左の通り

蛤 しま 國分小しげ

余曾償此蛤如清水燒茶碗

毛長白拂おひ 長崎 山本おつる

ぼかがおひ 同 原田もん

よなきにし 同 鶴田おたま

くつわおひ 同 吉田小ゆき

肥體欺白雪面似於多福宜爲甘酒屋招牌

ほらのおひ 同 鶴田おせい

凸凹平均際怪聲如陳陳

以下これを畧す

色山人

女腰の腰にたまれる大瘡を

賣にうられぞうられに賣

財行放士

夫木 中米の小濱の蜷あけも見ぞ

忍びてのみや賣はゆるとじ

世渡りの爲なればころ蛤

親にも見せて店にこそうれ

年を経てまだ小毛生ぬはまぐりを

夫にみせるもはづかしきかな

あふぎがひ金の浪をふきよせて

女郎かひをば餌にするなり

暫し馬刀志ほふきがひもはなたれて

あかねは今はとぶのどぶがひ

帆立がひ帆をまかせれるちよんの間を

見付られたる身のいたやがひ

信實

新六 あやしとぞ色珍しきいたやがひ

此腫あるをいたからぬとは

ぼれいとは酒吞上戸の溜飲に

用ゐてなほす瘡牡蠣のから

おほかたは検査に鰻とおんへども

真珠の瘡のかくすまじきを

財行放士

夫木 こゑがらす疾氣の濱のからす貝

拾ひ安くも思ほゆるかな

妾七威 貝群大禪威

今日よりは見貝ありてかたかきも

大ききことにいたら貝かな

色屑を漁りて腎迷を助く男兒の生血を助んが爲に日夜

悪業を作るとはむかしの學者が童子教に旨く示し、明

言を爰に擧出し説出すは朝夕の腎張を助くる南濱の地景

なりこゝは又居留地の名にあふ櫻川のほとりにて春

はなほなら櫻木の花さきれ花街の花に戯ぶるあり

ごまはふも中くおるがまじり燕に立し層樓を外より

見ればうつくしく内に這れまじり、おの糸に纏へる閨の

姫三尺帯のころび寝は見もうるごき風情なり花街

のあるが中にも泉屋の新泉樓はこれさんと月も隔子に

ごしのごき中米樓は東京の出店と聞けばおのづから都

を真似て風雅なり夫が次に花のかわりの梅の樓お客を松

のいろは屋はかきの手本のいろはしめ松源亭の松の

字はお客を松の源と文字にあらはす家の名も二葉の

松の千代かけてもごきごいのる祝詞なり風雅とこびて

競へどもオンガーイヤバノ長崎なまり玉筐ナトわた

らせたまへの艶言をへもアナタナットオイデマッシー

の地金出て兎角銀とは見ぬごき飢たるときの茶飯とや

老も若もきとぶて通ひそれがなかにには商ひの資本と費
し極樂の夢のさめたる地獄責受て悔しき跡思案學資と
失ひ處女の衣物を賣らせて韓語をまなぶはほんの娛樂
生花を請出し縦口を養ひすこし横口の不足におこる争
ひに二世のむための縁とへ雪と消ゆく木ばなし腐書生
と未ば夫婦のちかひして証券印紙帖用の証文かくば
ふるねこひと術なり風雅極る花街のさかへはこ
に書いめて夜鷹社會のありさまを説出す中の中山は夜鷹
の巢くふ所にて三十にあまる疲鷹の人だに見れば掴み
取ばなしはいと長きゆゑあはれよりとるく

寶迫氏著書廣告

一 善隣通語 全二冊 定價金五十錢

此書上は語格文法より下は商家日用の言語に至る迄簡述
明載且つ附するに国字解を以てし就中日用言語の如きは
上中下三級の尊卑を分ち一目瞭然尤も獨學に便す今日始
て渡韓する人と雖も此書を坐右にするとときは彼我談笑應
酬意の如くならざるはなし苟も朝鮮貿易に意ある人關ぐ
べしといふ珍書なり

一 韓語入門 全二冊 定價金五十錢

從來韓語の讀本其數に乏しむらんと雖も未だ曾て其梓に

正せしものなく而して先人徒に日用言語を樂知するを以て保んじ其語格文法等の要領を摘むに着目せざるよりして十歳の星霜を経るも尙其奥底を極る能はざる是其格法に疎きに因て然るなり氏夙に意を此に注ぎ此書と著すや格法を正し而して簡易赫灼實に初學に使す韓語に志すの士其階梯の宜きを得る此書に如くはなきなり

一朝鮮諺文

片楮

定價金壹錢五釐

此は即ち我五十音と同じく子母發音の原を示したる者にして韓語と學ぶの士必用の書なり

發賣處

在釜山港
元山津

協同商會支店

明治十四年六月廿五日出版御届

編輯兼 山口縣

隅田英次

出版人 長門豐浦郡豐浦村第八百八番地

本紙片價八錢

發賣處在釜山港

堀久太郎店

特67

377

026459-000-1

特67-377

朝鮮釜山戯話

隅田 英次/編

M14

ADD-0113

